

生き立ちの学習

～暴力暴言をくり返す、気持ちが不安定な子どもたちと～

日暮かをる

HIGURASHI Kaworu
本誌編集委員

私の勤務していた知的障害児学校は、子どもたちの暴力暴言が吹き荒れ、心の叫びともとれる声や、不安を抱えた表情や動きが学校全体にみられました。教員たちは子どもたちの暴力性、攻撃性、絶え間ない不安感にどう関わればよいのか悩み、授業も成り立たない状況に焦り、自信を失いかけていました。子どもを丸ごと捉えるため、子どもたちの抱えている生育史や背景を探り話し合いを重ね、子どもに寄り添うことの意味を何度も何度も確認していきました。そんな中での性教育実践です。

私は高等部1年生の男女合わせて9人の授業担当になりました。簡単な漢字を使った書き言葉でのやり取りも可能な、いわゆる障害としては軽度のグループの生徒たちとの学習です。

本校の中学部から進学してきた男子生徒4名のうち3名は、気持ちが常に不安定で、ちょっとしたことで（理由が分からないときも多い）簡単に切れイライラし、暴力や暴言が現れるなど人とのかわりに困難を抱えていました。机、椅子、ロッカーなどに蹴りを入れ、拳骨をぶつけ破壊したり、「死ね」「でぶ」「はげ」など相手の怒りを引き出すような言葉を連呼したりするのです。また、地域の中学校か

ら男女5名が、高等部で加わりましたが、いずれも不登校、リストカット、暴力など何らかの問題を抱えていました。

高等部になって集団が大きくなった分、刺激が増え、落ち着かない状態が拡大していました。小さいざこざから血を見るようなケンカやトラブルが絶えないのです。暴力や怒りは友だちだけでなく教員にも向けられました。日常的には小集団をつくったり、個別対応をしながら、落ち着いた時間をどれだけ作り出せるかと教員たちは気を配りあいながら高等部生活をスタートさせていました。

高等部では、性教育については年間10回を目安に取り組むことになっていました。中学部でも性の学習はありましたが、生徒たちが過剰反応してしまい、大騒ぎになり授業が成り立たなかったと引継ぎを受けました。特に私の担当するグループは大変だったそうで、手洗いや、歯磨きなど清潔に関する学習を少しだけ取り組んできたとのこと。私は、自信はありませんでしたが、騒いでしまうのは「性」への興味関心の表れと考え、避けずにきちんと取り組もう、生徒が興味本位に聞いてくることもそらさずまじめに対応しようということだけは決めました。

《高等部の「性教育の考え方」一人間らしく豊かに生きるために》

特に性教育を性の指導という捉え方ではなく、より人間らしく豊かに生きるための教育として位置づけたい。自分のからだのしくみ、異性のからだのしくみを学び、それぞれが成長してきた過程を学び、生命の誕生について学びあう。それぞれが違うことを認めつつ、一人ひとりが大切な存在であることを確認しあい、助け合って生きること、さらにより人間らしく、主体的に豊かな人間関係を目指して生きる力を高めるための教育だと考えていきたい。

自分の二次性徴を振り返って《授業の展開と生徒の様子》

高等部で自分のからだに向き合うには二次性徴から入るのが自然ではないかと考え、この題材を初めてとりあげました。知識としてだけでなく、彼らが体験してきた自分の「からだの変化」「気持ちの変化」を見つめる機会にすることを大事にしたいと思いました。

集団で取り組むことにより、「共通すること」「違うこと」が見えてきて、互いの理解が少しでもできたらとも願っていました。

まずは「生い立ち」を言葉にすることで、自分を振り返ることができないか。その時は、とにかく徹底して聴くことを大事にしよう。彼らが茶化したり、ふざけたりする言葉の中にも、本当は気づいてほしい願いが隠されていることもある。表情や言葉のトーンも含め、しっかり聴き取れることを第一と考えようと、前もって教員間で確認しあいました。彼ら自身も気づいていない本音や願いが引き出されるといいねと話し合いました。

①性教育スタート、導入（1時間）

授業が始まりました。9人が教室に集まると、勝手なおしゃべりが次々と始まります。性の学習を意識するあまり「セックス、セックス」とはやし立てるA男に「もううるさい！ やめて！」と怒鳴るA子、「うるさいのはお前だよ」「あー女はうるさい、うるさい」A男を加勢するB男にC男、まるで騒いでいる状態を楽しんでいるかのよう。一方で「そんなお子ちゃまほっとけ」と、へらへら笑いながらからかうD男。その上、たち歩く、ちょっかいを出し合うといった行動が加わります。

「こりゃ大変」と思いつつも、平然と（自分ではしているつもり）用意していた「絵本」（性の絵本②子どもから大人に生きる）の2ページ分だけ読みかせに入りました。トーンを抑えながらゆっくりと…絵本に描かれている裸の女性に反応し騒ぐ男子たち、当然ながら興味はあるのにどうしたらよいのか戸惑いが現れているようです。騒々しくなると、言葉をとめ待つようにしました。期待があるのか少し静かになります。また、ゆっくりと読みすすめました。

途切れ途切れではありますが、生徒たちが時折、目を、耳をこちらに向けていることも分かりました。こういうときは解説をしたり感想を聞いたりはしません。ゆったりとした時間、空間を少しでも共有することを大事にしています。

「女の子のからだの絵本」「男の子のからだの絵本」の中から一生を描いた場面を男女それぞれに模造紙に拡大し、「今の自分はこの中のどこにいるかな」と質問。

ここでも「オマエは、この這い這いしてるよ」「オギャーってない赤ちゃんなんじゃねえ?」「先生は、このおばあちゃんだ、日向ぼっこしてるよー」など、まずは人のことを茶化し、時には悪口を言って騒々しい。ケンカに発展しないように気を配りながらも、受け流しながら進める。そのうち「からだはこっち（大人の絵を指し）だけど、気持ちはここかな（ランドセルを背負った子どもを指す）」との言葉も出てきた。そこは大事。すぐに受け止め「わかる、わかる。からだは見た目『大人』。でも気持ちはその時々違うんだよね。実は先生だって、長いこと『大人』やってるけど自分が『子ども』だなんて思うときがあるんだよ」とみんなに返します。騒がしいが、大事なことは分かってくれそうです。

②小集団で「生い立ち」を語り合う（2時間）

男女別に3人の小集団を作り、教員が一人入り共通のアンケートに基に、丁寧に聞き取り教員が記録する形をとりました。生い立ちという大事に扱う必要のある課題であるということと、まだお互いの関係性も手探りの段階だったので、反発の大きい生徒や刺激を受けやすい生徒など考慮し、男女に分け小集団としました。彼らは全員書く力があり、自分でアンケートに答えることは可能なのですが、教員とのやり取り、聞き取ることを通して生徒と教員との関係・信頼を積み上げることが可能になること、生徒が思いついたときすぐに言葉にする、やり取りの中で更に「思い出」や「自分の気持ち」が呼び起こされるということを優先したかったのです。

アンケートの項目（抜粋）

- ・子どものとき、みんなから何と呼ばれていましたか?
- ・一番初めの思い出ってなんだろう
- ・思い出（学校に入る前、小学校、中学校）うれしかったこと、ドキドキしたこと、悲しかったこと、怒ったこと、失敗したこと
- ・好きだったおもちゃ、歌、TV、何でも
- ・好きだった人

- ・大人に助けられたと思うことありますか?その人の名前は覚えていますか?
- ・精通、初経のこと
- ・大人ってどんなこと、自分のことを「大人」と思うときありますか?

3人という人数と、何を話しても良いという空間の中で、思いのほか話を引き出せました。良いことを聞いていても必ず嫌なことも出てきます。友だちの話を聞いて思い出してまた話し始めるということもありました。女子グループでは「聞いて」「聞いて」と、項目がなかなか進まない状況にまでなりました。

いかに日常の中できちんと向き合っ「聞く」、「聞ききる」ことができているか教員たちは実感し、反省もしたのです。

③写真を通して自分や友だちの成長を知る（2時間）

赤ちゃん、幼児期、小学校、中学校それぞれの時期の写真を持ってきてもらいました。それぞれの写真を拡大カラーコピーし個別に黒板に貼れるように準備しました。

今回は9人一緒に授業です。

「この中で、一番初めにこの世に誕生したのは誰かな?」

というと、「お前だろう、ふけてるもん」とすぐガヤガヤと始まります。

「はい、その通りD男君でした!」（みんなの言っていることと違っていてもいいのです）

と、D男の誕生年月日の書かれたカードを一番上に貼り付けます。

さっきふざけていたことはもう忘れ「そうなんだ、Dなんだ、お前一番か」

次々と、生まれた順番に上から下にカードを貼っていく、それだけでも、友だちと自分との接点を感じられるようです。「へえ、同じような時期に生まれたんだね」などという会話も出てきます。

いよいよ写真の登場です。「これは誰でしょう?」

赤ちゃんだったりするとよく分かりません。推理するようにあてさせました。正解した写真を「この赤ちゃんがこんなに大きくなりました」「ほらこんなに可愛

かったんだね」などと生徒のところを持っていくと、みんなよく見えています。もちろん茶化す言葉も出ますが、全体が笑顔で優しい雰囲気になります。紹介した写真は、誕生日カードの横に並べていきます。

着物姿の幼いK子の写真に「すげー可愛い！」と素直に誉めるD男。いつもは顔を見るだけで激しくののしりあい、取っ組み合いのけんかになる二人なのに。

ずっと施設を点々としてきたため愛の手帳の写真しか手に入らなかったA男、大きな集団になったことも不安だし、その上写真が一枚しかないという現実、授業から逃げ出しました。

「無理しないでいいからね。いつでも戻ってきて大丈夫だからねー」とだけ声をかけました。時々廊下から顔が、目がのぞいているのが見えました。

一枚しかないA男の写真を紹介すると、いつもは仲の悪い女子たちからいっせいに「わー！A男可愛い！」「笑顔がいい！」と最上級の誉め言葉が出ました。

A男は、廊下で聞いていたはずです。

小学生時代の写真になると、誰なのか一目瞭然。それでも髪型の違いや、着ているもの持っているものに注目がいき「俺も同じキャラクター自転車だった！」「このTシャツ懐かしい！」などにぎやかにすすみました。黒板いっぱい写真が貼られ、成長がよく分かります。

授業が終わる頃、ようやく戻ってきたA男「俺写真無いんだよ、ずっと施設だし、これ手帳の写真なんだよ、可愛かった？」写真が無いことも隠そうともせず、うれしそう顔。

女子たちも、おだやかなA男に「うん、可愛かったよ」「Aさ、可愛いときあったんじゃん」といつもの過剰反応ではなく「普通」に応えていました。

普段は荒れている集団なのですが、この日の授業は穏やかに時間が流れました。いざこざも起きず、人を罵倒する大きな声も聞かれず、友だちをほめる言葉がたくさんあふれたよい空間となったように思います。

④アンケートの言葉から思いを出し合う（2時間）

前々回聞き取ったアンケートから、大事と思われるフレーズを大きく書きカー

ドにしておきました。

「発表をするよ、誰のかは教えません。みんなも友だちの言葉を聞いて感じることもあったらここでも自由に話していいからね」

掲示した写真（前回使用した写真）横のスペースにカードを貼りながら読上げていきました。（内がカードの言葉）

よく木登りしてた。木に登るのが好きだった

「あ、俺もやったぜ、だれだれこれ書いたの」

他にもミニ四駆だとかおもちゃだとか、このあたりはほのぼのとしたもの。

スカートめくりして、怒られた。万引きしてつかまった

「ガキみたいなことしちゃって、ま、俺様もやりましたけどね」

この類の話になると、A男、B男、C男、D男たちは自分の方がもっとすごいことやったと盛り上がり、勘違いの自慢大会にもなったりしていました。

C子「イヤーね、本当に子どもね！まだやってんじゃないの？」の言葉に、B男が「もうそんなことしねえよ、ガキじゃあるまいしな」と、他の男子に加勢を求める場面があり「そうなんだ、もうやらないんだ。なんでなんで？ 何時からそう思ったのかな？」私はすかさず聞き返します。

曖昧な部分も当然残しつつも、幼い頃やっていたことをやらなくなったこと、やらないと決めたことを意識化させていく、ここが重要な所なのではないかと思いました。

低学年の時、学校でいじめられてよく泣いていた。6年生の人がいつも助けてくれた

これはどちらかというとこれまでの学校生活で傷ついてきているB子の言葉

カードです。

「助けてくれた6年生がいたんだ、いいね」ふっと言うC子。

『しんたい』って言われてからかわれた

「それ、はやったよな。俺はしんちゃんって言われたよ」（「しんたい」「しんちゃん」は障害があることを暗に示すもので、からかいや、いじめの言葉として子どもたちの間で流行った時期があります）障害のことをからかわれた経験は、どの生徒にも共通のこととしてありました。内容は深刻なのですが、今日は明るく話を語り、うなずきあったり共感する様子がみられました。

バシリをやらされてた。万引きもやらされた

これはいつもちゃらちゃらしているB男のカード。

「俺様は強いのだ！お前達とは違う！」といつもなら上から目線で物を言いたがるD男が「いるよね、そういうの。何かと脅す奴、近寄らない方がいいよ。」

なるほど、強そうに見せてるけど、D男もきつと怖い目にもあってるんだなと改めて思い知らされました。

いじめられた話は、それぞれに共感することのようで話が広がりました。

「俺は、いじめられる前にいじめるね」と顔をこわばらせながら言いきるA男。

彼は、乳児院、養護施設を経て福祉園に入所してきました。どこでも彼の原因の分からない暴力や暴言が大きな問題となつては、居場所が変わりました。「いじめられる前にいじめるね」この言葉の奥に抱えている苦しみや悲しみを考えずにはいられません。

授業だけでは解決はしないこともじゅうぶん認識しながら、それでもA男がホッとできる人間関係や空間をつくることを大事にしていきたいと思った瞬間でした。

からだの変化については「そのころからだが変わっていったよね。どんな所が

どんな風が変わったかな？」と質問しました。男子は声変わりのときの状況を伝え合って盛り上がりました。「チン毛」「わき毛」「おっぱい」「ひげ」「のどちんこ」などどんどん出てきます。授業が進むうち、何人かの男子が女子の反応をちらちら見ながら半分面白がりはじめ、女子たちがこの雰囲気嫌がり始めました。このへんの判断が難しいのですが、この日は無理をせず、私の方で用意した教材の説明で終わりました。

⑤二次性徴の意味を知る（2時間）

詳しく再び二次性徴についての学習をしました。前回の様子から考え、特に女子への配慮から再度男女別の小集団で行いました。教員たちは、分かりやすい図の入った共通の資料教材を用意し、何でも答えると生徒たちに約束をして学習を始めました。

私は女子グループを担当したのですが、男子の悪口から始まり、日ごろの鬱憤をはききると既に半分の時間が過ぎている状況、ここでも毎日いかに話を聞くことをおろそかにしているか思い知らされたのです。時間も無くなったので、資料は別の時間で読み会うことにし、聞きたいことに答える時間に急遽変更。

「本当に何でも聞いていいの？」と言うC子。「約束だから、何でもいいよ」おずおずしながらも、「男の人の性器ってどうなっているの？邪魔にならないのかな？」との質問。A子、B子も興味を示しています。

「え？ そっち？」とも思いましたが「疑問に思っても他では聞けないか」と了解。

この日は、男性器について、図を示しながら、人間初めは男女に分かれていなかったこと、性器の成り立ちから機能、精通の現象など伝えました。「へえーそうなんだ」「男の人も大変だね」

A子、B子には父親はいません。小さい時に一緒にお風呂に入った経験も無いかもかもしれません。不思議なものとして興味を持っていたようです。

自分のからだでおきてきたことを改めて見つめなおし、二次性徴の本当の意味理解にたどり着きたいと思って考えた授業でしたが、脱線したまま終わりました。

しかし、いいのです。20分ほどのこの授業の展開から以降、彼女たちはからの不安や性に関する悩み、友だちや家族のことなど何でもつますくと相談してくるようになったのです。

⑥まとめ（1時間）

9人の集団に戻り、まとめをしました。

黒板にはいつもの写真、アンケートからの言葉カード、こちらで用意した「思春期」「二次性徴」「大人」「子ども」「からだの変化」「心の変化」そしてハートマークや「人を好きになる」などのカードを並べながら進みました。

なるべく生徒から出てきた言葉「大人なんだかー子どもなんだかー」「心は子ども子ども!」「少しは変わったかな」などを使いながら、時間をかけ発見したこと気づいたことを整理していきました。

この頃には生徒たちも教員たちも、いざこざが起きたり騒がしくなり途切れがちであっても、互いに気持ちを向き合わせながら授業ができると思えるようになっていました。

一つの単元を終えて、決して手放しでよかったとは思いませんが、この生徒たちと「性」の学びを続けていくことが楽しみになっている自分に、少しうれしくなったことを覚えています。

